

平成23年度から最大15年間の事業として開始された『科学技術イノベーション政策における「政策のための科学」推進事業 (SciREX事業)』について、令和2年度で第2期期間の5年間（平成28年度～令和2年度）が終了することを踏まえ、有識者による中間評価委員会を開催して、2回目の中間評価を実施。

## プログラムごとの評価の概要

### (1) 基盤的研究・人材育成拠点

※拠点ごとの評価の詳細は次頁

GRIPS (SciREXセンター : **B** GiST : **A**) 東京大学 : **S** 一橋大学 : **A** 大阪大学・京都大学 : **A** 九州大学 : **A**

#### ① ネットワーキング

- ・SciREXセンターを中心に、本事業の10年間の実施を通じて創出されたネットワーク・コミュニティは、**重要な無形の資産として評価**される
- ・今後、ネットワーク・コミュニティを「**基盤**」として見える化し、戦略性を持って維持・活用していくための取組が期待される

#### ③ 人材育成

- ・修了生の人数は増加しており、**各拠点の人材育成の活動が、10年をかけて定着・普及してきていると一定程度評価**できる
- ・第3期も取組を引き続き充実させていくとともに、事業終了後も継続できるような方策の検討が必要である

#### ② 共進化

- ・政策の意思決定等に本質的に貢献が出来た研究活動は限定的であり、「**共進化**」の実現に向けた状況は**道半ば**である
- ・EBPMに関する活動支援など、行政におけるEBPM担当部局を中心としたフォローや、政策と研究を繋ぐ機能の実質化が必要である

#### ④ 研究・基盤

- ・各拠点の特長を活かした研究活動を引き続き進め、「**科学技術イノベーション政策のための科学**」という学際的領域の**発展・深化**を図るべき
- ・これまで培った研究・基盤をベースにし、人的ネットワークの拡大等を図るとともに、研究成果を社会にも発信していくことが期待される

### (2) 公募型研究開発プログラム

JST社会技術研究開発センター (RISTEX)

- ・各年度新たな課題設定を行い、**社会状況の変化に応じて適切にプログラムの運営が行われている**
- ・科学技術・イノベーション政策形成の基盤となるような研究開発を推進する、という視点の強化を期待
- ・行政のニーズに応じた課題設定、行政官を巻き込んだプロジェクトマネジメントといった取組を更に期待

### (3) データ・情報基盤

科学技術・学術政策研究所 (NISTEP)

- ・取組は、**第2期期間中を通じて着実に進められ、大学や政策研究機関における利用も進んでいる**
- ・今後はNISTEPの調査研究と一体となって、中長期的に取り組みられるべきものである
- ・共進化を意識し、より効果的・効率的なデータ・情報基盤の整備に向けて、**不断の見直しを期待**

## 事業全体の総合評価

- ・各プログラムについては、一部において計画通りの取組・成果が上げられなかった点が見られるものの、**概ね当初の計画通り、着実な取組が行われ、多くの人材や様々な領域に広がるネットワークが蓄積された**
- ・一方、各拠点における研究成果が**政策形成に直接影響を与えた例は必ずしも多くはなく、「共進化」が十分なされたとはいえない**
- ・各基盤的研究・人材育成拠点における**事業終了後に向けた現時点での取組は必ずしも十分とはいえない**
- ・今後の第3期期間は、**これまでの成果の蓄積が政策形成に結び付けられるとともに、事業終了後もこうした取組が継続していくための対応**が各大学と政策当局の双方に求められる

## 今後期待される取組の方向性の概要

### 1. 事業全体のガバナンス強化

- ・長期にわたる事業において、関係者の関係性が硬直化し、組織が形骸化するリスクが存在しており、この観点を意識したガバナンスが重要。SciREX事業運営委員会では**ビジョンを持った運営体制の構築**が望まれる
- ・**事業終了後を強く意識した事業全体の運営が求められ、各拠点大学は自立化の観点も含めた今後の中期計画を早期にまとめるべき**

### 2. 共進化に向けた政策研究と政策プロセスのつなぎ機能の強化

- ・本事業全体として、共進化に向けた状況は道半ばと言わざるを得ず、全ての関係者が改めて本事業の目的を再認識し、共進化を推し進めていくことが必要。共進化を進めるにあたり、**アカデミアに限らず行政側にも、EBPMに関するリテラシー向上や取組の強化など改善の余地が大いにある**
- ・行政の各政策担当部局に対する働きかけについては、SciREXセンターだけでなく、**文部科学省においても政策研究と政策検討・企画を繋ぐための支援機能が存在していることが効果的**であり、NISTEPにおいても共進化を促進する機能強化が重要である

### 3. 持続的なプラットフォームづくり

- ・本事業を通じて創出されたネットワークは必ずしも可視化されておらず、また付加価値の高いプラットフォームとして十分に機能できていない面がある
- ・このネットワークが持続し、参画する人々にとって利活用しやすいプラットフォームになるよう戦略性を持った対応の検討が望まれる
- ・共進化を進めるためには、**産学官のセクターの壁を越境する人材のキャリアパスが重要**であり、その機会の充実が期待される

### 4. 学際的領域としての発展・深化

- ・国際的な研究動向も踏まえて優れた研究活動をより一層推進し、各拠点の取組がアカデミアにおいて、存在感を持ちながら更に発展することを期待
- ・拠点事業終了後も引き続き、公募型研究開発プログラムの実施等を通じ、**科学技術・イノベーション政策における「政策のための科学」の分野へ研究者が参画していくことを期待**。科学技術・イノベーション政策に関わる学会との連携等により、学際領域として発展することが重要

基盤的研究・人材育成拠点 拠点大学の評価の概要

領域開拓拠点

**政策研究大学院大学**  **総合拠点**

**SciREXセンター**  **B**

【第3期の展望・全体講評】

- 事業全体のとりまとめ機関として、計画に沿ってコアカリキュラムの編集、サマーキャンプやオープンフォーラムの実施等の取組がバランスよく進められた。**組織としての位置づけを学則上明確にする**など、事業終了後を見据えた取組も見られた。
- 一方で、SciREX事業のネットワーク形成や、研究成果の政策形成への具体的な貢献といった期待に対して、その**成果は必ずしも十分とは言えず、他の拠点に比して多くの予算が投入されながら、各拠点大学の連携を取り、全体をリードする機能を十分に発揮できたとは言えない。**
- 既に助走期間は終わっており、これまでの実績を踏まえ、リーダーシップを持って学問領域の確立、教育・研究のあり方、事業終了後の各拠点大学との連携のあり方等、**5年後を見据えた構想作りや政策への実装の進め方等の方向性を明確にするための検討が求められる。**

**科学技術イノベーション政策プログラム**  **A**

【第3期の展望・全体講評】

- 第3期以降を見据えたこれまでの取組はあまり明確では無く、現行の教育・研究を改善しながら、事業終了後の人件費の確保も含め、今後に向けた取組を加速的に進めていくことが求められる。
- プログラムの改革と相まって人材育成の面で大きく成果が出たことは高く評価される。**学位の取得できるプログラムを提供するという他拠点とは異なる取組の基盤は確立されつつあると考えられる。
- SciREXセンターとの区別が必ずしも明確では無く、今後取組を進めていくに当たって留意すべき。**

**東京大学**  **S**

【第3期の展望・全体講評】

- 事業終了後も継続的に教育プログラムを提供する体制が担保され、専任教員を確保するなど、学内においても定着が図られていることが分かる。**また、博士課程の研究分野に科学技術政策分野を組み込むなど、博士課程レベルの人材育成が計画されていることも評価でき、今後の更なる取組の進展が期待される。
- 大学の規模等を活かした人材育成により**官公庁に多数の修了生を輩出し、特徴的な研究成果**を出しており、長期的な意義がある成果を上げている点で大いに評価できる。今後はこの蓄積を「科学技術イノベーション政策における「政策のための科学」」全体の発展に生かしてほしい。

**一橋大学**  **A**

【第3期の展望・全体講評】

- これまでの取組によって充実させた人材育成プログラムの質を維持しつつ、安定的に運用するとともに、産業界や行政、修了生とのネットワークを活用し、拠点で獲得した学術的知見の活用を推進するため、具体的な取組を進めていくことが期待される。
- イノベーション研究の中核となる機関として、**地域イノベーションに関する活動との連携や産業界、理工系大学との連携も積極的に進め、大変特徴的な成果**を出していることは評価される。
- 一定の成果を上げているにもかかわらず、**事業終了後を見据えた展望が十分に描けていないことが残念**であり、第3期期間中の早期に、経営学や経済学といった従来のディシプリンに留まらず、科学技術・イノベーション政策に関する人材育成や研究の取組を継続していくための見通しを立てることが求められる。

**大阪大学（京都大学）**  **A**

【第3期の展望・全体講評】

- 第3期に向けて、事業終了後の継続を考慮していることはうかがえるが、これまでの10年間の成果を今後制度化し、第3期期間中の早期に学内の制度・組織として継続するための具体的な進展が見られることが期待される。
- 科学技術・イノベーション政策の中でも**ELSIという特色を活かしたプログラムの下、多様な分野の大学院生等が参画し、多数の修了生を輩出**していることは評価できる。
- 関西圏における2つの近隣大学の連携の取組は非常に意義があり、少なくとも今後5年に関する展望は描かれているが、**早期に事業終了後の見通しを明確化することが必須**である。

**九州大学**  **A**

【第3期の展望・全体講評】

- 当初から目指していた高い目標である**大学院専攻の設置には至らなかったものの**、この間の取組の結果「STI政策人材開発トラック」構想が全学の承認を受けるなど、**第3期に向けては具体的に事業が着実に進展しており、今後こうした取組を着実に進めていくべき**である。
- 中央官庁との距離があるという条件の中で、地域の自治体と連携を進めるなど、**地域やアジアとの連携という特色を打ち出そうとしている点**は評価でき、学内の研究者を更に巻き込み、連携を強化しながら、取組を進めることを期待する。
- 東アジアに関する研究については、中国からの教員招へいの取組が中心になっているが、**国際的な視点を持った活動は重要**であり、今後さらに対象を広げた取組が期待される。